

「映画と講演のつどい：コスタリカに学ぶ」

2019年06月27日

根岸線沿線九条の会連絡会は6月22日に「映画と講演のつどい」を開催した。根岸線沿線九条の会連絡会は、磯子地域九条の会、森九条の会、洋光台九条の会、港南台九条の会、栄区九条の会、大船九条の会の6つの九条の会が連携した会である。連絡会はかなり以前からあったが、実質的に2014年から活動を始め、それぞれの九条の会のある駅前での街頭宣伝に参加し、協力し合ってきた。以来、小林節氏、浜矩子氏、宇都宮健児氏などを招いて、講演会を行ってきた。一つの九条の会だとできなくても、連絡会を作って協力し合えば、大きな力になり、相当な働きができるようになる。「点」を結び、根岸線沿線の「線」へと、広がりを持つ連絡会に成長してきたと言える。

今回は「コスタリカに学ぶ」をテーマに、映画と講演を企画した。まず、伊藤千尋氏が、「コスタリカから9条へ」と題して、歯切れのいい口調で講演された。伊藤氏は世界を駆け回っているジャーナリストで、コスタリカをしばしば訪れ、細かな情報を集めている。コスタリカは中米に位置する国で、面積は四国と九州を合わせたくらいで、人口は490万人の小さな国である。中米は小国がひしめき合っていて、戦争と内乱に明け暮れていた。コスタリカも内戦が起り、1948年に革命軍を率いて内戦に勝利したホセ・フィゲレスが、後に大統領になって、1949年に軍隊を禁止し、常備軍を無くす憲法を制定した。日本に次いで2番目に平和憲法を作り、武力によらずに平和を構築する国家を目指し、世界に平和を輸出している。コスタリカは「積極的平和主義」で、平和外交を展開している。1980年に「国連平和大学」を創設し、1983年には「永世積極的非武装中立宣言」を出している。1987年には、時のアリアス大統領が近隣3ヶ国の戦争を終わらせ、ノーベル平和賞を受賞している。大統領は「無防備こそ最大の防御。軍を持たないことで強くなった」と語っている。現在、国連で交渉中の「核兵器禁止条約」の提案国、議長国として活躍している。日本は唯一の被爆国なのに、この条約に背を向けている。米国に媚びへつらう姿勢は何とも残念なことである。コスタリカは警察と国境警備隊だけで専守防衛に当たっている。軍隊を無くしたのは、内戦で国民が痛めつけられた苦い経験と軍事予算にカネがかかりすぎるといふ理由であった。国家予算の30%を費やしていた軍事費を教育費に回すと、義務教育は13年間、完全無償になる。また、医療、福祉行政も満たされ、環境も整備されていく。小学校で最初に習うのは「誰もが愛される権利を持つ」ことで、対話型授業が行われ、子どもの時から「民主主義」が養われていく。幸せでない、愛されていないと思った時は、「違憲訴訟」を気軽に起こすことができるそうで、1年間に2万件もあるという。大統領が米国のアフガニスタン攻撃を支持した時、学生のロベルト・サモラ君が憲法違反と訴え、勝訴したことはマスコミを騒がせた有名な話である。2019年、国連の幸福度調査では12位、途上国ではダントツの1位だそうである。人権尊重の憲法理念を現実させるといふ発想が幸福度を高めているのである。

映画「コスタリカの奇跡」は平和憲法を生かした国作り、識字率を上げ、寿命を延ばす民生国家に生まれ変わる様子を写し出していた。米国の社会学者マシュー・エディー氏らが共同監督で制作したもので、米国人向きに作られている。米国は中南米諸国で政権交代をさせるため、何回軍事力を用いてきたことか。更に、世界最大の武器輸出国で、軍産複合体で、戦争しなければ、経済が回らない構造になってしまっている。

日本はコスタリカに先駆けて「平和憲法」を持っている。この憲法を守り、生かし、世界に平和を発信する責任があるのではないかと改めて思わされた集会であった。